

2

主役：「動詞のかたまり(述語)」 ってどんなもの？

「動詞」ということばはよく聞きますが、「動詞のかたまり」ということばは、おそらく皆さんにとって耳慣れないものだと思います。むしろ「述語」ということばの方がなじみ深いことでしょう。

この本では日本語の述語のように 核となっている動詞と動詞を強く限定する表現 とが一体になったものを「動詞のかたまり」や「述語」と言っています（英語の伝統文法の「述語」とは少しちがいます）。

先ほど考えた「名詞のかたまり」で、名詞が核となりそのまわりに名詞を限定する表現がくっついてひとかたまりになる、と考えたのと同様です。

たとえば国語の授業で「私はそのようなことは言いませんでした」という文が出てきたときに、「私は」を主語に、そして「言いませんでした」を述語と考えます。

しかし述語となっている「言いませんでした」をよく分析してみると、動詞の「言う」だけでできているのではなく、動詞の「言う」を核にして、「言う」+「ます（丁寧）」+「ぬ（否定）」+「です（丁寧な断定）」+「た（過去）」という作りになっていることがわかります。

英語では、これが didn't say となります。こうした日本語の述

語に似た感覚を「動詞のかたまり」感覚、あるいは「述語」感覚と呼んでいるのです。

英語におけるこの「動詞のかたまり（述語）」感覚については、はじめのうちは10のパターンに分けて覚えるとよいでしょう。

私は、その10のパターンを、中2から大学受験生にいたるまで、白紙によどみなくスラスラと60秒以内に書けるまで、何度も何度も反復して書かせるトレーニングをさせてきました。

そしてこの英語の「動詞のかたまり」感覚をひとたび自分のものにするなら、格段に英文が**見えやすく**、また**読みやすくな**ってくるのです。ですからどうぞ、ぜひがんばって自分のものにしていってください。

では、「動詞のかたまり（述語）」の主なパターン10をあげてみます。

表6. 「動詞のかたまり（述語）」の主なパターン10

1. V(s)/Vp	1語のみ：現在形や過去形
2. 副詞 + V(s)/Vp	頻度や否定やその他の副詞 + 動詞
3. 助 + V	助動詞（don'tなども含む）+ 動詞の 原形 cf. 「助」
4. have/had + Vpp	現在完了形や過去完了形 cf. 「完」
5. be + Ving	進行形 cf. 「進」

3 S（主語）の感覚とは？

今度は、**主語の感覚と形**を考えてみましょう。

まず、主語の感覚に関してですが、ひとつの例を示してみます。

2つの文は、どこがちがうのでしょうか。

- ① The boy broke the window.
- ② The window was broken by the boy.

きっとすぐに気づいたと思います。

そうです。中学時代にやった「あれ」です。

①は能動態と呼ばれるふつうの文で、②はその受動態、つまり受け身の文となっています。

よく書き換え問題で練習したのではないのでしょうか。

それにしてもそれぞれの文の視点と重点がどこにあるか、考えたことがありますか。

たとえば、「その窓を割ったのは例の少年だよ」という訳語感覚に近い文は、①、②のどちらでしょうか。

わかりやすく言えば、**主語は話し手の視点を表しています**。

そうすると、①は「少年」に視点が合わされていて、②は「窓」に視点が合わされていることになります。

つまり、①は「その少年はね」といった感じの語り出しであるのに対し、②の方はたとえば、「その窓はね」といった調子で語り始めているのです。

ところで、「視点」と「重点」はちがいます。

英語の世界では、**特に英語の書きことばの世界では、「文末焦点：end-focus」という原則**にそって表現されることがよくあります（守らなければならないルールのようなものではなく、特に書きことばで重んじられるひとつの傾向のようなものと考えてください）。

たとえば、これも中学時代にさんざんやらされた書き換えですが、次の2つの文のニュアンスはどうちがうのでしょうか。

- ① My father bought me a bike. 〈SVOO〉
- ② My father bought a bike to me. 〈SVO〉

書き換えはよくやったけど… たぶん…

①は「父は私に自転車を買ってくれた」で、②は「父は自転車を私に買ってくれた」ではないでしょうか、と自信なさそうに答えるかもしれません。

（前から下線部を順序どおりに訳しただけのちがいです…）